

# 白隠禅師シンポジウム講評

野口 善敬（花園大学国際禅学研究所所長）

今回のシンポジウムに当たり、数多くの応募原稿があり、さまざまな立場から、白隠禅師とその教えに対する多岐にわたる考えが発表された。学術的なもの、報告的なもの、法話風なものなど、バラエティーに富んだ内容であり、白隠禅師とその教えを多角的に紹介することとなった。

最初の江上正道師「白隠墨蹟2500点～墨蹟大調査と図録発刊を通じて～」は、長年、国際禅学研究所において芳澤勝弘氏が中心となっていた白隠墨蹟蒐集の状況について、その現場の状況を詳細に報告したものであった。調査先で初めて見る掛け軸を広げる時の、その緊張感が伝わってくるような発表であった。二番目の富増健太郎氏「白隠禅画墨蹟における関防印・落款について」は、国際禅学研究所で蒐集された白隠墨蹟のデータ、特に真贋判定に際しても重要な要素となる関防印・落款の整理作業と、その成果について発表されたが、誠に興味深い、学術的な内容であった。

墨蹟研究の意義について、江上・富増の両氏によれば、白隠禅師が何を伝えたかということとは墨蹟を通して汲み取ることができるし、それを現代にどう生かせるかということが大切だとの意見であった。

3番目の小澤英夫氏と四番目の蘆田太玄師の二人は、それぞれ「白隠禅を現代にどう生かすか～『白隠禅師坐禅和讃』を中心として～」・「現代社会に生かしていくための白隠禅師坐禅和讃」という題目で、『白隠禅師坐禅和讃』をテーマとした発表をされた。「白隠禅師坐禅和讃」そのものは、白隠禅師の自筆にかかると思われる墨蹟が一点、それも不完全な形でしか残されておらず、少なくとも白隠禅師自身の主要な思想を伝えたものではないと考えられるし、その自撰か否かも含めて疑問が残る。だが、宗門で使用されている「中峰和尚座右銘」にしる「大慧禅師発願文」にしる、真撰だとすることはできないものは数多くある。ただ、真作か否かは別にして、「座

右銘」などがそれぞれの和尚の名前を冠され、その思想を伝えるものとして流布し、大切に扱われ続けてきたこと自体が大切なことであり、「白隠禅師坐禅和讃」についても、白隠の名前が冠され、白隠禅師の大切な言葉だとして現代に広く唱えられ、白隠禅の教えの代表として高い知名度を得ていることが重要なのである。

「白隠禅師坐禅和讃」は、禅門における非常にオーソドックスな説明内容で構成された文章であり、小澤氏は、自分なりに詳細な注釈を付けられているが、その熱意は敬服に値するものである。ただ、仏教語の理解に少し不十分な部分があり、今後、一層の推敲をお願いしたい。蘆田師も布教の側面からアプローチされ、独自の切り口で理解を深められているものの、引用資料や用語の扱いに配慮が足りない。一層の注意を払っていけば、より良いものとなると思われる。

五番目の松下宗柏師「たち返り、たち返りつつ祖師の春～「無相の白隠」の探究～」は、自らの修行体験を踏まえながら、「無相心地戒」や「洞山五位」を取り上げ、白隠禅の深みについて語られたものである。

禅門において、公案は、本来、論文で扱うことができない、扱ってはならないものであろうが、この論考で松下師は、白隠禅における修行のあるべき姿を明確に示されている。「無相心地戒」などは、戒律を守るという土壌がない日本においては、下手をすれば諸刃の剣にもなりかねないという危惧もあるが、やはり高い哲学的な内容を持つものだと改めて感じさせられた。

白隠禅師がどう偉いのか、その教えがどう立派なのかは、一人一人が自分で判断すべきものであり、その人の置かれた立場や考えで違ってくるであろう。これらの発表が、奥深い白隠禅を理解する一つの手掛かりになったことを期待したい。